い」「〜知りたい」と自分のねがいやおもいを言うようになり、さまざまな人と関わるようになりました。今では代名詞の「ガラス割り」もなくなり、落ち着いて生活を送っています。

(2) 実践報告Ⅲ　社会的困難をかかえた仲間を切り捨てない　――板垣さんのとりくみから――

(a) たいへんな人

「問題行動が多すぎて他の施設を退所になるので、太陽の家で受け入れられないですか？」市のワーカーがそんな相談を持ちかけてきました。「どんな問題を抱えているの？」と尋ねると、「お金や物を盗む、施設を飛び出す、幼児を襲う等々。その施設では睾丸の摘出手術の話までされている」との答えが返ってきました。当時、市直営のW学園の定員が空いていたので「まず、W学園に頼むのがすじ」と話をすると、「W学園は児童施設があるから、受け入れられない」との回答。後日、市の障害福祉課から届いた厚い資料は犯罪歴のオンパレードでした。

(b) 出会いはその一言で

「団地の14階から飛び降りて死んでくれ！」面接の時、母親は何度も懇願しました。ふっと我に帰り、「北海道の施設に入れてくれ。間に海があれば帰ってこられない」と言ってきます。「お母さん、そんなに息子さんが邪魔なの？」と問いかけると、「もう、どうしていいのかわからない」。板垣さんに「あなたはどうしたいの？」と問いかけてみました。「女の子を襲いたい、お金

を盗りたい、物を盗りたい……」当然そんな答えが返ってくると思っていました。そうしたら「あなたの来るところはここではないよ」と断るつもりでいました。ところが、彼から返ってきた言葉は「みんなと働きたい」でした。その一言で、受け入れる決心をしました。

(c) 嵐の中

受け入れた板垣さんはすごかった。ひと時も目を離せません。道路を挟んで立つ幼稚園をじーっと見ている。職員の財布からお金を抜き取り、それを持って施設を飛び出していく。職員に見つからないように、建物の外側をほふく前進で進み、門や塀を飛び越えて走り去っていく。車で追いかけると、藪の中に逃げ込んでしまう。そのまま、無賃乗車で県外まで出かけていく。性衝動が高まると見知らぬ家に入り込み、女児を襲ってしまう。そんな繰り返しが続きました。

嵐の中の小舟に乗っているような気分でした。走り去っていく板垣さんの後ろ姿を見て「この人は、鍵をかけても、塀を高くしても飛び出していくだろうな」と思いました。職員と「衝動性にふりまされている板垣さんが一番つらいに違いない。板垣さんにとって、背中で語れる職員になろうよ。毎日板垣さんの顔を見て、やるなよと言い続けることはできない。板垣さんが我々の背中を見た時、自制できるような関係をつくろう」と話し合いました。

(d) とりくむうえで大事にした点

職員は、板垣さんに対して否定的な対応や制止するためだけの約束を避けました。約束は本人

のやりたいことに沿うことにしました。「～をするためには、～をしよう」というように、そのねがいがかなうための約束をしていきました。「このことを実現するには、これをすれば良い。そしたら、やれる」という当たり前のことですが、板垣さんが今まで生きてきた中で、実現することのできなかった方法です。そうして、まわりから信頼を得るためにはどうすれば良いのかを少しずつ学んでいったのだと思います。

もちろん、それだけですべてがうまくいったわけではありません。無断の飛び出しはあり、警察に呼ばれることは続いていました。その時にも、約束に立ちかえり、なぜいけなかったのかを本人に納得してもらえるように話していきました。そのことを職員間で意志統一しました。

(e) 一番好きで一番怖い

5年目くらいから少しずつ落ち着きを見せるようになってきました。その頃から「所長さんが一番好きで、一番怖い」と言うようになっていたのです。警察に捕まると「太陽の家、所長さん」と警官に伝えるので、「嫌い」と言えるわけがありません。彼に対して粗暴な行為をしたことはありません。それでも彼は私が「怖い」というようになっていきました。

いくつか思い当たる節があります。問題を起こし捕まった板垣さんを警察から引き取り太陽の家で話し合いをしていると、「アメ横に行く」と言い始めたのです。思わず胸ぐらをつかみ「俺とお前の5年を返してくれ」と泣きながら詰め寄ってしまいました。その時の顔は何とも言えない困った顔になっていました。「好きな人を泣かせてしまってどうしよう」と思ったようです。そんな心境の変化が、彼の抑止力の大きな根拠になっていたような気がします。

(f) みんなの中の自分

アメ横に行くとりくみを始めました。所属する班全員でアメ横に行き買い物や食事をして帰ってくるのです。願いは、ルールの中でこそ尊重され、具体化することを学んでほしかったからです。板垣さんが私のところに「アメ横に行きたい」と言いに来るようになりました。「それはどうやって決めるの？」と聞き返すと「みんなで決める」と自分に言い聞かせるようになってきました。時には、自分の頭を抱え込みながら「何もたくらんでいない」と言いに来ます。「えっ！」と聞き返すと「ベランダの女の人のパンツも見ていない！　あやしくないから大丈夫！」と、自分に言い聞かせるように去っていきます。まわりとの関係の中で、自制を続ける板垣さんの姿があります。

(g) 母親の気持ちの変化

出会った時には「死んでほしい」とわが子に懇願した母親でした。板垣さんが落ち着き、彼の仕事であるステンドグラスがあちこちで評価されるようになると、彼の頭をなでながら「あと何を言ってやれば、うちの子はもっといい子になるかね」、「うちみたいな子でも人さまのお役に立つんだね」と言ってくれるようになりました。